

Title	指向性について : 「意味」の意味
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	年報人間科学. 1986, 7, p. 123-151
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12087
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部（一九八六年三月）
『年報人間科学』第七号二三頁―二五頁

指向性について

——「意味」の意味——

菅
野
盾
樹

指向性について

—「意味」の意味—

- 一 意味と心—問題の発端
- 二 意味文は指向的である—チザムの主張
- 三 チザムのメンタリズム
- 四 意味は関係ではない—セラーズの意味論
- 五 類比説のあらまし
- 六 点引用の記号作用
- 七 意味理論の革新へ
- 八 結びにかえて—実在論の彼方

一 意味と心—問題の発端

「この部屋はひどく暑いな」、「窓を開けましょうか」。このような何気ない会話が有意味であるために、視覚に映るこの「記号デザイン」はどのような条件を備えなければならないか。第一に、日本語（これが日本語だとして）の文法が指定する配列に、それが適っていないてはならない。これを初めとして、さまざまな、一見するよりずっと複雑な条件が、会話の意味に寄与していることだろう。現在、この事実には構文論・意味論・語用論といった記号論の各水準で、ますます明らかにされつつある。

言語が意味するための条件をとりまとめ「意味条件」とよぼう。このなかに、人間の心ないし心理にかかわる条件が含まれているのは明らかだ。冒頭に掲げたある種のデザインは、意味をもつ以上単なるデザインではない。それは記号（もつと限定していえば、ことば）という名のデザインである。かりにそれが二羽のオオムの音声を、忠実に仮名に写しとったものにすぎないなら、ひとはなんと言うだろうか。これは日本語の会話ではない、オオムはことばを解さないからだ、たしかにこの音は日本語の音にそっくりだが、音がそのままことばではないの言うまでもないことだ—こう彼は言うだろう。言い換えれば、記号デザインはことばを解する人間の所産である場合に限って、はじめて言語の名に値するのである。ところで、ことばの理解とは高度な精神的働きでなくてなんだろう。ものいわぬ獣や白痴は、かりに精神の持ち主だとしても、ことばをよくしなむという点で劣等な精神しか持ちあわせない、とひとはいう。要するに、掲げられたデザインが意味の実をあげるためには、それが心あるものによって創りだされたことを要するのだ。

意味条件には心に関する条件が混じっている。この事実を正確にどう解釈するか。これが、われわれがここで吟味したい問いに他

ならない。幸いわれわれは、近年この問いをめくり、二人の哲学者のあいだにはなほだ興味ある論争がおこなわれたことを知っている。そこで、これを絶好の手引きとしつつ、この必ずしも容易でない問いの解明にあたることにしよう。二人の争点はおおまかにこう捉えられる。一方の論者チザムは意味条件の源に心という實在を発見したと信じた。ことばが意味するのは、最終的には、心がそうするのだ。他方、論争者セラーズに言わせれば、ことばが意味するという事態こそ、およそ意味なる現象の究極であり、心にそなわる意味作用は単に二次的な、その遅ればせな形態にすぎない。両者の言い分はおいおい詳しく調べるとして、ここであらかじめはっきりしておきたい一つのことがある。ことばと心の連関を理解したい者にとつてわれわれの問いが避けて通れぬ閥門であるのは自明である。しかしこの問いはまた、形而上学のいわば最大の問い、あの心身問題と深部で結びついている。セラーズが当面する問いに永く携わってきたのも、この深い結合をできるかぎり満足すべき仕方、解きほぐそうとする企図によるものだった¹⁾。

「田中さんは、夕方から雨になると信じている」という描写は、ひとつに、田中さんの心理にかんする報告である。一見して明らかによようにこの種の文は「田中さんは……と信じている」という組み立てを備えている。信じるとはつねに何かを信じていることだ。空所に置かれる文が、信じられた当のもの、すなわち事態を代表するのである。こうしてわれわれはここに、しかじかの事態への〈差し向け〉(reference)を発見する。言い換えれば、信念(ひいては心理現象一

般)には〈指向性〉が伴うのである。この文が真だとしよう。もし行動主義心理学に立脚する研究者が田中さんを調べる場合、彼はどうするだろう。信念は部屋の机が見えるという意味では「見えない」から、彼は田中さんの行動(ここには言語行動も含まれる)を仔細に調べるだろう。たとえば、夕方出掛けるさい田中さんが傘立てへ手を伸ばすかどうか、これも彼の観察事項のひとつである。調べの結果、心理学者は「被験者はかくかくの行動状態にある」と結論するだろう。

果たして結論にはあの指向性がきちんと取り込まれているのか。セラーズはこう訊ねて、心身問題探究にとつて指向性が鍵である所以を説明している。もし心理学者の結論に指向性の要素が収められているなら、それは行動・性向といった概念をほみだした剰余ではないことになる。人間は「心」をふくめてまるごと行動主義心理学で捉えられることになる。逆に、もし差し向けがそこに収められていないとすれば、この種の心理学は、心理学を自称するものの、心について決定的な要素を取りこぼしていることになる。それは単に心的なもの、身体のうえの相関物しか捉えてはいないことになる。

しかしわれわれが眼をみはるのは、このあれかこれかを前にしたセラーズの態度の特異さである。彼は決してこの二者択一に身をゆだねようとしない。彼はくりかえし行動主義が人間学としては誤りであることを明言している。にもかかわらず、残りの選択肢をも彼はおおざける。なぜなら、これは行動主義の概念構成にたいする正しい意義を無視し、ひとつの誤謬からもうひとつの誤謬へ、すなわ

ち心的実体というそれへ、振子のように走るにすぎないからだ。こうしてセラーズにとって、指向性とは、行動主義のかたちをとる唯物論とデカルト流儀の心的実体をふりかざすメンタリズムの双方から解き放たれて、もういちど心身問題を考え直すための問題、問題区分からするとまことに小さいが、しかし波及するところはまことに広大な、問題中の問題なのである。

二 意味文は指向的である——チザムの主張

言語は他の表現（絵画、ダンスなど）ではそれほどはっきりしない格別の能力を備えている。ことばはことばについて、いともやすやすことばを振り向ける。論理学者が言語自身について語るもうひとつの言語を「メタ言語」と呼んでいることは、よく知られている。言語のもつこの種の特性や用法などを「意味論的」と総称しよう。チザムはこれに堪んして重大な主張を唱えるのだ。ある場合に彼はこの主張を、意味論的特性は心のもつ指向性に基礎を有すると言いはらわす。それはまた場合により、すべての意味論的言明はある心理的言明を含蓄すると、記号の使用を記述するには必ず心理的のものに言及せざるをえない、とも言いあらわされる。言い方がさまざまであるのに応じて論点の微妙な相違が引きこまれ、議論がいやでも紛糾せざるをえない。チザムの真意を全体にわたってあらかじめ精確にする仕事は、もちろん大切には違いないが、今こですませるにはあまりに繁雑だ。それより、具体的に彼の主張のひとつを

取り上げ、ただちに考察をおこなうほうが得策だろう。他のタイプの主張に含まれた論点については、必要に応じて後で補っていきたい。

かねてからチザムは、すべての心理現象は指向性をもち、そしてこの特性はただ心理現象だけにそなわるとするプレントナーの後に承けて、いわば言語版プレントナー・テーゼの確立に努めてきた。

彼によれば、物理現象を記述するには必要ないが、心理現象の記述には欠かせない特有の言語、すなわち「指向的言語」(intentional language)が存在する。彼の予想では、この主張は単なる言語の領域への適用をこえて、心の存在論に直接拡大できるはずのものであり、言語の指向性は、本来、意識のそれを自らの基礎として要求するはずなのである。というのも、ことばは心を抜きにすれば、単なる物音にすぎないから。物音が意味することができらうか。さて、言語に備わる指向性を云々するのには、それを検出するための基準を定式化しなくてはならない。実際、チザムの努力はこうした基準を完備したかたちで取り揃えることへ傾けられた。どんな努力を払ったのか、成果はどうだったのか、こうした点については別稿にゆずるとして、ここでは彼が差し出したひとつの基準のうちのひとつを見ておく必要がある。というのは、言語の意味論的特性を言語的指向性として同定するのに、彼がこれを使っているからである。

問題の基準は次のようなものだ。ある単文を考えよう。この文に実詞（つまり普通名詞や固有名詞、あるいは論理学という確定記述

など)が使われているのにもかかわらず、この文およびこの文のちよど否定にあたる文のいずれれもが、問題の実詞が外延を持つとも、反対に、持たないとも、そのような外延に含意をいささかも伴わない場合がある。こうした場合にこの文は「指向的」なのである。一見して人間の心に関するとおぼしい文が、この基準でテストしたとき、いうところの指向性なる性状を呈することが分かる。たとえば、「母親は娘にふさわしい夫を捜している」はくだんの基準によって指向性を持つ。なぜならこの文は、名詞句「娘にふさわしい夫」の指す人物が実在するとも、しないとも、そうした含意を伴わないからだ(ただし話し手は、そのような男性の存在をすくなくとも「前提」している、とは言えるけれども)。こうした文のもつ性状が述部動詞の「捜す」に源を発するのは明らかであろう。ここから推定して、「捜す」という行為は単なる物理的出来事のひとつではありえない。実在しないかもしれないといった否定性の形態への差し向けを、物質はよくするだろうか。これは「指向性」(今度は非言語的)を帯びた、その意味で心理的な事象なのである。コンピュータが記憶されたファイルから必要なデータを「捜す」というのは比喩にすぎない。ここで生じているのは律気な機械的处理であって、「捜す」のはコンピュータを操作する人間のほうなのである。

こうした道具だてをととのえたチザムは、「ことばの意味や使用を記述するのに使われる文」に観察の眼をむけている。結論は紛れようもない。この種の意味にかかわる文(semantic sentences、簡単に「意味文」とよぼう)もまた指向性を伴うのである(1)。たとえば

「英語の giant は巨人を意味する単語だ」と語る英語教師は、巨人なるものが存在するとかしないとか、この英単語の外延にかかわる含みを彼のことばに盛りこんではいない。だから単語に解説を施したあと、彼はあらためて「ところで巨人などというものは空想の産物で、存在しない」と言うかもしれない(反対に、「巨人はすでに絶滅したヒトの一種だった」とまじめに語るかもしれない)。こうした付け加えが可能なもの、はじめの解説が実詞の外延に触れるところがなかったからだ。

意味文は指向性をもつ。チザムに言わせれば、なにか心理的なものへのかかわりを持たなければ、この種の文は指向性を發揮できない。つまり、意味文は偽装された心理的文にはかならないのである。これには反対が表明されるかもしれない。英語教師が口にした文は、あるいは、本来は次のような文の縮約だとみなせるかもしれない。「英語を国語とする人は、人間の形をした巨大な生き物を giant という単語で呼ぶ」と。問題の語は、話し手がそれを使用するかどうかにかかわらず、一定の物音またはデザインである。結局この文がいわんとしているのは、英語を話す人が特定の場合に(たとえば絵本で巨人を見たときに)しかじかの音声を出すということなのだ。この文は単に特定条件が生体の特定の反応を惹き起こすことを語るにすぎないのであって、ここにはなにか心といった格別のものが介入する余地はない。もしそうだとすれば、意味文は、なるほどある意味で「指向的」かもしれないが、ほかの言い換えを許さぬ、純然たる心理的文とはうけとれないことになる。

意味文を行動主義の語り方へ解消してしまおうとする見地から出されたこの疑いにたいして、チザムは、なにかを指してある名で呼ぶためには、そのなにかをなにかとして「理解する」ことが必要だと切り返す。絵本を愉しむこともが、描かれた巨人をそれとはべつもの、たとえば大木とつけとれば、決してgrantという音声を発しはしないだろう。この意味で、命名には理解が先行するのである。というより、命名には理解という、行動主義的用語にはまったくなじまぬ要素が介在するのである。この点を考慮にいれ初めの意味文を書き直せば、おおよそ「英語を話す人は、なにかを人間の形をした巨大な生き物とみなす（信じる、知る、など）場合にかぎって、それをgrantと呼ぶ」となるだろう。こうして彼は、言語使用を記述するには話す主体の信念、知識、あるいは知覚など、要するに心理的なものへの言及をばくわけにはゆかぬ、という結論を繰り返すことになる^⑤。

三 チザムのメンタリズム

チザムの主張はおおよそこう要約できる。「意味する」、「指す」などの動詞を含む文は、言語のことがらとして指向的であり、これを「言語的指向性」と呼ぼう、ひいては心のはたらきに言語的指向性の源があるという意味で、そうした文は実のところある心理的な事象をあらわしている（この心のはたらきを「心的指向性」と呼ぼう）、と。彼はこの見地を上にあげた動詞だけでなく、他の多くの言語使用

にかかわる動詞にもおしひろげている。「命令する」、「述べる」、「断言する」、「いいきる」などはその若干の例である（念のため原語をあげれば、それぞれcommand, state, assert, affirm）。たとえば「断言する」をとりあげよう。新聞の経済欄に年末に物価はかならず数パーセントあがるという記事が見出されたとする。新聞の文章は経済見通しにかんしてある種の断言をしているのだ。これは一見するような、非心理的な文だろうか^⑥。すこし考えてみれば、そうでないことが分かるだろう。というのは、単なる活字の列がなにかを断言するなどは想像もできないから。ことの真相は新聞記者がそうした文（記事、これをSとする）を使ってある命題（これをPとする）を伝達しようとした、ということにある。おおよそ文が、まして使用されない文が断言するはずもない。人が文を使用することによって、文はある命題を表現することを得、さらに文に一定の行為の値が附与されて、ここに断言という言語行為が実現するのである。とする

と、「SがPを断言する」という表現は、実のところ、「ある人がPをあらわすSを使って断言をおこなう」に本来等しいといわなければならない。しかしこのような意味である人を断言をするものとして描写することは、チザムによれば心理的なものを引き合いに出すことなのである^⑦。

しばらく文の言語行為としての可能性には留意しないことにしよう。文はさまざまな行為の差にかかわりなく、共通の命題内容を運ぶように思われる。「太郎は日頃酒をのむ」という平叙文と「太郎、日頃酒を飲むように」という命令文は、それぞれの行為とはべつに

行為ならざる同一の命題を表現すると解すことができるかもしれない^③。いまわれわれは、チザムのいう広い意味での意味文に「命題」という要素を見出した。彼はこう主張しているように思われる。すなわち、断言をはじめとする一連の動詞(言語行為にかかわるいわゆる「実演動詞」*performatives*の一部である)が登場する文は、使用されることによつて命題を表現する関係にはいるのであつて、ここに心的指向性のあとが認められる、と。

前節で、文や語について語るメタ言語的文が結局は心的指向性をあらわすという主張を見た。今彼は、言語行為にかかわる一群の文がやはり心的指向性をあらわすという主張をおこなっている。一見種類の違う文を、彼は二つとも、「意味論的」な文として括るのだ。

その理由はまさに、これらの文には命題といった心的な存在者へのかかわりが伴うということなのである^④。われわれはここにメンタリストとしてのチザムの真面目をみいだす。たしかに、文が命題という抽象的存在者にかかわるといふ見地は、必ずしも心を実体のひとつに数えるという意味のメンタリズムと連結してはいない。(たとへば、命題にかんしては実念論を、言語の働きにかんしては、心などへ訴えない構造主義を採用する哲学者を想像できる。)しかし、チザムが紛れもない古典的なメンタリストとして振る舞っている証左は、「心的エピソード」(mental episodes)ないし「思考」(thoughts)なる存在者を彼が要請する事実である。つまり「命題」が両義的なのだ。一方で、それは個人の体験する出来事としての思考をいい、他方、それら思考を統べる一般者をいう。思考は個別の出来事とし

て時間や空間とかわるが、同時にそれぞれがいわば普遍者の代理の資格を帯びるのである。あたかも個々の語が時空のなかで生じる出来事でありながら、しかし時間・空間とは没交渉な、しかしかの語として聴き取られるように、思考は単なる出来事の域を踏み超えている。それは、パースの呼び方にしたがうと、ある内包的存在者の型代(*tokens*)^{かたしろ}にはかならない。

この区別に基づいて、チザムの主張を要約するひとつの図式をしつらえよう。

Sはpをσする || Sはtを表現するの^に使用され、tはpを指向する。

ここで、Sは記号の形態(文ないし語)、pは文ないし語の略号、σは一連の「意味論的」動詞、最後にtは「思考」をあらわす。二つ目のpは事実や事態などと呼ばれるものを代表するから、この図式は概ねつぎをいわんとしているのだ。表立った発語にかんする文(これも発語であり、いわゆる意味論的文にはかならない)は、文が表現する心的存在者の指向性にもとづいて分析される、と。議論の簡単を期すため、今後はσの値を「意味する」にかぎろう。またpを語ないし論理学という記述とみなすと、かわりに簡単な図式

Sはpを意味する || Sはtを表現し、tはpを指向する。

が得られるだろう^⑩。

図式の解釈に勝手な予断を持ち込んでほならないが、ざつとながめただけでいくつかこの図式の特徴的な含みが浮かび上がってくる。まず、これは抽象的・心的存在者を容認する点で実念論に荷担しているとおぼしい。第二に、特筆すべきは、言語そのものから意味論的権能が奪われる仕儀になる。つまり、心的指向性にならないで言語的指向性も世界の正式な要素であるという見地とはことなり、後者は前者によって「分析され」てしまう結果、姿を消すというのだ。ここから第三の論点が出てくる。言語は思考表現のために使役される道具である、という言語観にはかならない。

このような「古典的」見地は受け入れられるだろうか。定立には反定立が後続すべきだ。次はセラーズの説を提示する番である。二つの立ち入ったつきあわせは、その後になされるだろう。

四 意味は関係ではない——セラーズの意味論

セラーズの見地はチザムのととは正反対に映る。古典論者チザムが「我考う、ゆえに我語る」と言うとなれば、革新論者セラーズは反対に「我語る、ゆえに我考う」と言いたいように見える。言語的指向性を心的なそれへ還元するのがチザムであるとすれば、セラーズはここを逆転して、言語的な指向性の独自固有性を称揚するのである。指向性にかんする彼の見解を誤りなく見届けるために、セラーズの問題攻略を二面にわたる作戦として理解したい。ひとつは、意

味文そのものの分析をチザム流の心的指向性抜きで最後までやりとげること。ふたつは、逆に、心にかかわる語り方あるいは心的談話を心という実体の仮設なしに再構成すること。これが彼のよく知られた「ジョーンズ神話」である。もちろんふたつは密接にむすびついている。セラーズ自身ふたつを別々のこととして語っているわけではない。それどころか、後に確認するように、第二の部面での勝負ははじめの作戦が功を奏するかどうかにかかっている。この意味でも二つは一体のものなのだ。ではセラーズは意味文をどのように分析するのだろうか。

彼の分析は心的存在者やその指向性をひきあいだすチザムのものよりずっと単純だ。「英語の giant は巨人を意味する」は、セラーズによると「英語の giant は・巨人・である」へ帰着する。分析の眼目は見過ごしてしまいそうな小さな黒い点にあらわされている。それはセラーズにより「点引用符」(dot quotes)とよばれる、語や文などの記号形態を分類するレッテルをつくるためのしるしなのだ。この分析が主張しているのは、giant という記号が、日本語であれば「巨人」と呼ばれる記号と同類であること、それはまたドイツ語なら Gigant、フランス語なら géant などともよばれる記号とも同類であつて、それらと一括りにしていれば巨人印を捺すことができるということ、こうしたことである。

たとえが役にたつだろう。実に豊富な商品を描いた家具店にいったとしよう。そこには変哲もない事務机があるかとおもえば、マホガニー造りの高級な書齋机もある。こどもの学習机、部屋の片隅に

もおけるライティングデスク、パイプ脚の軽便な机、どっしりした民芸家具など、実に多種多様な机が陳列されている。その机の一つひとつに店のほうで「机」の商標が貼つてある。というのも、問題の家具はいずれも机としての機能をはたすからである。この家具が机印をもつのは、それが別の、机印を貼つたあの家具と同じ役割をするからなのだ。同様に、giant はいわば巨人語の一員であり、同類の単語と同じ役割をこなすことができるのである。

一般にセラーズによれば、

Sはσを意味する || Sは概念σを表現する

|| Sは・σ・である

という分析がなりたつ^⑩。さて、一行目には「概念」、「表現」という問題をかます用語がでる。セラーズは概念、命題といった抽象的存在者を拒むノミナリストであるのだから^⑪これは分析の単に前半部を代表するにすぎない。その唯名論の成否はどうか、この点に深入りする必要は当面ないだろう。要は彼が、チザムの従つたような概念から心への経路をひとたび断つてしまったことを確認しておけば足りる。それだから「表現」の意味も古典論者の場合とは違つてくる。彼らにとり概念は心なる実体がとるある種の様態、唯一の一般者に規制された複数の心的事象ないし思考である。まゝに掲げた図式をもう一度見よう。Sが「表現する」[†]がそれである。したがつて、「表現」とは記号と思考との事実上の関係ならびに後者と一般

者との論理的関係との積とみなすことができるだろう。いずれにせよそれは立派な「関係」のひとつなのである^⑫。しかしセラーズのいう「表現」はおよそなにかとなにかとの「関係」ではない。そこをはつきり見るために、分析の二行目を見よう。「表現する」にあたるのは、そこでは「である」というコプラだ。しかし、こうした類別をおこなう述定を関係とみなすのは難しい。それはある要素の集合への帰属関係になぞらえられる。が、帰属「関係」とはいうものの、ふつう言われる関係ではそれはない（たとえば、本が辞書の右にある、彼は彼女を愛す、アメリカは日本より大きい、といった関係のどれにもそれは似ていない）。この種のコプラを関係と称するのは、論理学でいう選言や連言を関係と称するのが、もつともらしいがしかし誤りであるのおなじ誤りなのである。ここにセラーズのおもだった論点がある。すなわち、彼は意味は関係にあらずというのだ。もとよりこれはいづれ再考しなくてはならない重大な論点である。

点引用符をもちいた分析を牽引している概念のひとつに記号の「役割」(role)がある。というのは、それを使って作られた記号類別のレットルは、ある言語の要素がきまつた役割を、すなわち引用符にかこまれたデザインが分析者の言語で演じる役割とおなじ役割を、それもまた演じることをあらわすからである。うゑに掲げた例についていうと、「giantは・巨人・である」は、英語の一要素が、日本語（これが分析をおこなう者の言語にはかならない）の一要素と記号としての役割を共有することを示しているのだ（ただし語っているわけではない。この点は後述）。いったいこの役割とは精確にはな

んなのか。セラーズは記号の役割を、当の記号が記号体系のなかで記号相互間にたもつ関係（ここには当然記号の対象や主体の行為が関与する）として理解するようである。いいかえれば、それは記号のいわば構造特性である。ここには記号の意味とは記号的差異にすぎないとしたソシユール言語学と共通の見地が示されている。残された問題のひとつは、こうした役割概念がメンタリストの要請する道具立てを密かに抱えこんでいないかどうか、この点を見極めることであらう。

セラーズによる意味文の分析の要点は以上につきる。古典論者チザムが言語を心や心的指向性によって分析してみせたのに対し、たしかにそこにはそうした要素への表立った言及がひとつもない。もしこの分析が成功していれば、意味文にかぎり心などという実体をひきあいに出す必要はないことになる。いいかえれば、言語が意味するという事態をメンタリズムをよそに理解できることになるのだ。しかし、事態はいっそう急進的である。というのは、セラーズは単に意味文の理解に心的指向性が不必要であるばかりか、そもそも心的指向性が無用だと言いたいからである。チザムは言語的指向性なる性状を言語のなかに訊ねて、いわば定性分析によりその存在を証拠立てようとした。もし言語的指向性が存在するなら、心的指向性もまた存在するのではなくてはならぬ、とチザムは断定する。なぜなら前者が後者に基礎をもつことはあきらかだから（物音やインクのしみがなにかを意味するだろうか、というわけだ）。ところで言語的指向性はたしかにある。だから、心的指向性も当然容認しなくて

はならない——こうチザムは言う。いま、セラーズはこの自明事をその反対物へ、歴然たる予断へ追いやった。だから、このかぎり心的指向性を容認するすじあいなどありはしないのである。しかし、セラーズには心的指向性にかんする独特な見解がある。思考と言語の類比説がそれである。彼はこれによって心にかんする古典論を表立ったやり方で超出しようと企てた。あらたにその類比説を見なくてはならない。それがすんだ後で、あらためて初めからセラーズ説の検討がされるだろう。

五 類比説のあらまし

心は見ることができな。色、かたち、重さ、そうした属性を心はなにひとつもちあわせない。これは心の捉えがたさを物語ると同時に、心探究の秘密がここに横たわる事実を歴然と示している。セラーズは心にかかわる語り方、あるいは心的談話が一種の理論的談話であると見做す。洋の東西を問わず、古代人は心を息吹きとも風とも見做した。それは心の働きのあの素早さ、こうしようと思えばすぐ手が欲しいものに伸びるその迅速、不斷にざわめきたち、いっときも休むことのないその動きなどが、ひとには驚きだったからだろう。心が風だとは、しかし、隠喩にすぎない。風はほこりを舞わせることができるが、心には無理な話だ。心を風と観じるのは、あたかも今世紀の物理学者が不可視の原子を太陽系に譬えたのに似て、観察できないものを可能なかぎり合理的に理解しようという企図に

でた、いわば窮余の策なのである。こうした策をひとは普通「理論」と呼ぶ。心は所与ではない。なるほどわれわれは自らの心を覗きこめる。が、それはどこまでも理論的存在者としての心なのだ¹⁵⁾。

いまセラーズはメンタリストの当然視する実体としての心を廃棄した。とはいえこれは、われわれが心なき人間となった、というような途方もないことをいうわけではない。あいかわらずひとは思考し、想像し、意欲しつづけるだろう。問題は世界をつかむさいの概念性なのだ。セラーズの語った「ジョーンズ神話」を手短かに再話する用意はすでになかば整っている¹⁶⁾。しかしそれを実行するにはここで、神話時代人が採用する概念性を明示する必要がある。

彼ら（そのしゃべる言語のゆえに「ライル人」と呼ばれる。周知のように、ライルは行動主義に立脚する心の哲学を展開した『心の概念』の著者）は心理的なことば使いの欠けた言語しか話さない（大雑把にいうと、彼らのことばはチザムのいう言語的な「指向性」をおびていないと見做すことができる）。彼らは心やその働きについて語るかわりに、行動（これには言語行動がはいる）や行動への性向を口にする。つまりそれは行動主義的言語なのだ。名が必要なら、「原始ライル語」と呼んでおこう。われわれのことばと比較して、この言語はなおふたつの面で貧しい。第一にそれは、前節で問題にした意味にかかわる語り方をなしえない。意味文は原始ライル語ではないあわせないのである。さらに理論的な語り方もそれはもちあわせない。しかし、他の語彙や論理語（選言や否定をあらわす語など）ではわれわれの言語となんら遜色ない表現力を、それはもっている。

われわれにとつての心理的なもの、とりわけ思考に相当する言い回しを、ライル人がどんなふうに語っていたか、具体的に一瞥しよう。へしかじかと考えること（to think that *p*）は、彼らにとり第一にへしかじかと語ること（to say *p*）であり、第二にそれはへしかじかと語る、短期かつ直前の傾性（a short-term, proximate propensity to say *p*）にほかならない。彼らにとり思考とは、まずもつてそれが出来事であるかぎり、ある内容を口に出して語ることなのであり、派生的に、そのように語る傾性である。へしかじかと考えること（は原始時代においては、実際、へしかじかと声に出して考えること）（to think-out-loud that *p*）以外ではない¹⁷⁾。

注意が必要である。この「語る」は単なるオオムのおしゃべり、あるいは物音などではなく、ことばの理解を伴うものでなくてはならないし、また嘘やたわむれであつてはならない。ライル人は単なる物音とことばを区別できるし、一般に、可知的な行動（精神病理学者がいう了解可能な行動）と、そうでない無意義な行動あるいは反射的行動のちがいもわきまえている。またこれは近年盛んとなった言語行為説から見るとセラーズの見地の特異な点なのだが、語ることは「行為」であるとはいえ、ただちに「社会的行為」——聞き手に向けられ、相互性のうちに運ばれる行為、あるいはオースティンという発語内行為——ではない。たとえば、発語「約束します」はここでいう語りの形態にびつたりと重ならない。

こうした概念性のなかで暮らしていた彼らのライル共同体へ、いま意味にかかわる語り方と理論的なそれとが追加されたと思像せよ。

こうして彼らは自分たちの発語にかんし表立って口にするようになる。(留意すべきはここでセラーズが設けた前提である。意味論的談話はメンタルな要素を伴わない。いいかえれば、意味論的概念は心的行為の枠組みから独立なのだ。この主張は前節で詳しくみた。)やがてわれらの英雄ジョーンズが登場する。彼はいささか異例な傾性を発見して驚く。ふつうならその種の傾性は発語に取って代わられるのに、いま彼が目のままにするのは、こうした代置をへずに他の傾性や行動に直接結びつく傾性なのだ。たとえば、水を飲む、と声にだして考える傾性(水を飲む、と声にだして考える行動)を経由せずに、別の傾性(水はどこにあるか、と声にだして考える傾性)や行動(水を飲むこと)へ直行するのだ。彼はこの種の結合を「理論的に」説明するために、観察できない存在者を要請する。その意味でそれは「内的」である。また、ライルの枠組みが個人の言語行動の断片に負わせていた役割をひきつぐはずのものであるという点で、それは個人的歴史を点綴するエピソード、しかも言語に類比したエピソードなのだ。それはいわば「内的談話」(inner speech)にほかならない。さて理論の仕上げに、ジョーンズはこうした存在者へ恥ずかしくない名を与えるだろう。それが「思考」なのだ。

天才ジョーンズは思考あるいは内的エピソードの意味にかかわる次元について、どのような理論を組み立てるだろうか。心が意味するとは、彼にとってどんな事態なのか。セラーズ流の意味文の分析をすでに見たものにとり、その点の想像はかたくない。彼はまず「内的」ならざる、文字どおりの談話が意味することの分析をすませるだろ

う。その仔細をくりかえすにはおよぶまい。意味は関係にあらず。これが彼の結論である。あげられた成果でもって、今度は思考の分析にとりかかる番だ、と彼は考える。フランス語の引用符で内的エピソードをあらわすと、たとえば

《giant》は(英語を話すひとの心のなかで)巨人を意味する。

ということができる。これと先に掲げた意味文「giantは英語で巨人を意味する」との類比はあきらかだ。したがって、記号の機能的分類の記述をつくりだす点引用符に類比する、心的談話の断片の分類を記述する引用符を用いていけないことはない。それがダイヤ形引用符である。うえの文のかわりに、これを使えばあらたにつきの文が得られる。

《giant》は◇巨人◇である。

語とそれを囲む新しい引用符からできた記述は、個別の出来事としての概念に添付される普通名詞であって、分析者ジョーンズの手持ちの言語素材から作られたものだ。いいかえれば、それは概念型代(concept-token)を類別するレットル、あるいは概念型(concept-type)の名にほかならない¹⁸。これはライル共同体に備わる拡張された原始ライル語が、およそどのような構成をそなえるかを物語っている。それは対象言語として英語様の言語、メタ言語として日本

語様の言語という二層からなることばにほかならない。

おなじようなやり方で他の心的意味の形態を分析することは、ジョーンズにとりそれほど難しいことではない。要するに、心にそなわる意味の秩序を分析するためには、字義的な、言語の意味作用の概念だけで十分である。非言語的ななにか実体としての心の作用などは一切不用なのだ。以上でわれわれはセラーズの言語と思考との類比理論(簡単にいうときには単に「類比説」と呼ぶ)のあらましを知ったことになる。

六 点引用の記号作用

ここではつきりしたことがある。類比説の命数は意味文にかんするセラーズ式分析の正否いかんだということ。もし分析が成功裡になされていれば、類比そのものにはいまのところもつともな点こそあれ格別の不都合はないのだから、全体として理論の先行きはあかるい。ところがもし分析が失敗であったなら、それは類比の根柢を掘り崩すから、理論は全体として潰えさらざるをえない。指向性にかんする一書を編んだマラスは、古典論者チザムと革新を標榜するセラーズとの論争の核心を取り出して言う。思考あるいは他の心的な出来事の意味を所有する以前に、言語の意味にかかわる範疇をもつことが可能か、と。そして彼はセラーズが成功裡に分析を運んでいるかどうかはいぜんとして議論の余地が残る、と付け加えている¹⁹。そこで今後しばらく考察を、意味文の分析が期待どおりの成果を

ほんとうにおさめているか、この点に集中したい。後にふたたび類比説そのものの問題点へ立ち帰るためにも、これは必要な作業なのである。

まず、セラーズ流の点引用符をもちいた意味文の「分析」が、実際のところ何をおこなっているのか、曖昧である。それはどのような意味で「分析」とよばれるのか。疑問はこれにとどまらない。はたしてこの種の分析が、セラーズが清算したはずの思考実体を不正なルートで密輸入しているおそれはないのか。類比説の評価にむけて道をあやまらないためには、はじめにいささか形式的な考察を入念に施しておくなくてはならない。つぎの設問をわれわれの考察のスタートにしよう。点引用分析は記号論の観点からして、どのような意義をもつか。いいかえれば、点引用の記号作用は、なんなのか。

前出の例を見よう。「英語の giant は巨人を意味する」は、彼によると「英語の giant は・巨人・である」へ分析されるといふ。しかし、はじめの文は語「巨人」を理解する者でなくてはこれを理解できない。もし点引用符を使つてつくりだされた述語が語「巨人」をはじめ、各言語におけるその同類の総称にすぎないのなら、あとの文が意味のうえではじめの文と違うことは明らかである。というのは日本語の単語「巨人」を知らない者にも後者は理解できるからだ²⁰。

この仮定によると、後者は「英語の giant は日本語の「巨人」と同じ言語的役割をはたす」を含蓄する。しかしこの文は英語と日本語のふたつの語が同一機能をもつことを述べているだけで、問題の機

能についてはなにも触れてはいないのである。はじめの意味文はそれ以上のことを意味している。それは英語のある単語が日本語のある単語とはたらきが同じであることに加えて、それがまさに「巨人を意味することをいいあらわすのだ。

セラーズ自身この点は十分に気がついている。彼は意味文が単に、二言語のある表現間に機能的同一があることを語る文ではないと明言する^②。意味文は類似をあらわす文に似ている。「太郎は次郎に似ている」という文を理解できる人間は次郎の風貌を見知った者にかぎられるだろう。次郎がどんなか、それを知った者だけが、この文によつて太郎にかんする知識を増やすことができる。それ以外の人間は単に二人の個人が似た容貌をしていることを知るにすぎない。彼にとつてこの文は太郎を描写する役に立たないのである。以前使った比喩をふたたびもちだしても良い。ある家具がべつの家具と同類であることがわかったとしても、それが何の役にたつかは必ずしもわからない。まだ商品知識に乏しくワードローブが何かを知らない新入りの店員は、家具に貼られたレッテルをたよりに商品を陳列するだろう。しかし彼が「これこれはワードローブである」という先輩の発言を解さないことは明らかだ。

それゆえ意味文の「分析」にともなうひとつの前提は、点引用符に挟まれた表現を分析者（ないし分析を理解する者）がすでに知っているということである。これは点引用符があたえられた表現から単にその名を作りだす道具ではないということを意味する。それを用いて作られた表現全体（点引用）にとり、引用された表現の形が

あくまでも大切なのである。これは通常の引用符の考え方からすると正統からはずれた見方だ。引用の正統説によると、語と語の引用とはまったく別物にすぎない。平家物語は中世に書かれた軍記物語である。「平家物語」は内容にふさわしい、簡にして要を得た書名である。正統説はこのいずれもが正しい用法だとみとめる。しかし、平家物語は漢字で四文字である、というのは誤りなのだ。なぜならそれは実のところ数十万語におよぶ長大な物語だから。ところが、点引用符はあくまでも引用された表現の形をひきずっている。いいかえれば点引用の表現力には引用された表現が幾分なりとも奇与しているのである。正統説の言い方を借りれば、点引用においては、表現の使用 (use) とその言及 (mention) の区別をきつぱりと引くのは不可能なのだ。

セラーズが歩んでいる道程が意味論の正統説が敷設するものとは異なることを念頭におくべきだろう。いま直面している問題状況にややちがった角度から光をあててみよう。クリプキは点引用符による分析につきのように疑問を呈している。「ドイツ語の und はそしてを意味する」を「ドイツ語の und は・そして・である」へ分析する場合、両方の文に登場している und はいわゆる型代語 (word-token) とみなされねばならない。意味文が言語外のなにか抽象的存在者へかかわるとみなす実念論をセラーズは拒んでいる。それゆえ主語に立ったこの横文字はそつした存在者の名ではありえない。彼の巧みな呼び方にしたがうと、それは「分配的な単称名辞」(distributive singular term) にほかならないのだ^②。ところで、いちども事実の

うえて生起したことの無い型代語を想像するのはやさしい。もしかすればドイツ語の連言をいう接続詞に *ungswweiterichen* などという長たらしい語があるかもしれない(だれひとり口にしたことはないのだけれど)。この場合、問題の語にたいする分析文は真、しかし空虚に真である。事情は「黄金の山は山である」が真、しかし空虚な意味でそうであるのと似ている。これは困ったことではないだろうか。

この疑問は、セラーズのいうように、フレーゲ以来の意義(*Sense*)と指示項(*reference*)の区別に依拠している。und を主語にした文と仮想のながながしい接続詞を主語にした文とは、長い接続詞の型代がない場合でも、つまり語の指示項が欠けた場合でも、意義のうえて別なのである。だから、クリプキの疑問を晴らすには、意味論上のそうした概念区別をあらためて整備しなおす必要がある。右のような主旨のことをセラーズは述べている。集合(*class*)と属性(*attribute*)の区別、点引用であらわされる、類別をおこなう述語がいったい何を代表するののかという点など、広汎で入り組んだ問題が、ここには結びつく。ここで一刀両断な解決を望むのはむりだろう。しかし彼がクワインの示唆をいれて、つぎのように述べていることは注目にあたいる。点引用は単純な要素をつなげて直接ひけらかしたものである²³。意味にかんする語り方(意味文)は、言語要素と言語のそのの存在者との関係をあらわすわけではない。それは言語の内部で生じている出来事なのだ。いかえれば言語の自己限定としてそれは生起する(もちろん非言語的なものとの一切の關係が断た

れたというのではない)。そのために、分析文はもとの表現の「直接引用」(*direct quote*)をおこなうのである。ちょうど誰かのもの言いがどのようであるかを「分析する」場合、当人のくちまねをそこに混入するのが目的にかなうのと同じように。

点引用をセラーズが「例示する分類語」(*illustrating sortal*)と呼んでいることもうへの整理に裏書をあたえる。und も and も・そして・だ、と述べることは、こうした横文字にいわば「そして」印を貼ることなのである。このレッテルはある表現の機能を雛型に照らし合わせて分類するために使われるのだから、そのデザインが肝腎である。レッテルは言語素材に付与されるのであって、両者のほかにレッテルが指示するなにか抽象的な非言語的なもの(連言性あるいは「そして性」)を捜しても無駄だろう²⁴。レッテルによる記述はそれがある特性を表現することに基づくのではない。そこには特有の意匠が描かれている。その貼られた品物のなかに間違えがないことを保証するのは、レッテルの形態である。

ひとつの比喩をしばらく凝視しよう。さまざまに異なる夥しい作品群からテイントレットの真作を選ぶ仕事にたずさわる美術史家がいるとせよ。彼は本物のテイントレット作の絵画を少なくとも一例知るはずである。でなければだれも鑑定を依頼しはしないだろう。ある作品は彼の見るどころいくつか画家の特徴を示している。しかし真作にかなする知識に照らし、これを間違いなくテイントレットの手になるものと決めるにはいくらか疑いも残っている。彼はどうするだろう。残された道は、真作を検討し直し、文献にあたり、史

実をさぐり、新たな決め手を捜すことだ。決定につねに白黒をつけられるとはかぎらない。場合によっては決め手の不足をついに満たせないかもしれない。単に真作の蓋然性を云々できるだけに終わる作品があるかもしれないのだ。いずれにせよ、鑑定とは真作の知識を光源とする照明にほかならない。ある作品がティントレット作に違いないと断定することは、それが特定作家の作品性（ティントレット性）を所有することの発見ではない。ある絵が暗いとか、人物を描いているとか、こうした絵画の特性と、それがティントレット作であるという「特性」とは並列しない。後者はむしろ作品群の類別に役立たせられる「真作」の表象、雛型としての真作なのである。

意味文が言語表現の機能分類をおこなうというセラーズの洞察もこれに似た事態を語っている。第一に、意味文を理解しうる者はあ美術史家のように、問題の表現についてその働きを実例にそくして弁えていなくてはならない。第二に、セラーズによる意味文の翻訳は、当の意味文について「語る」というよりは、それについてなにごとかを「示す」あるいは「示唆する」(imply)のだ^⑤。ここには美術史家の鑑定と似た事態がうかがわれる。というのも、鑑定は当の作品についての記述などではないからだ。それは真作の「本質」をたいまつのように掲げて、ティントレットが制作したかどうかに対し無差別な作品群の暗がりから真の作品を照らしたかどうかなのである。セラーズはたびかさねて「意味する」(means)が「記述的ではない」と述べている。これは彼の論敵チザムの承服できぬ点だった。意味文が記述をおこなわないと語るとは、それが真理値をも

たないと言うことにひとしい。「findは、そしてを意味する」は真であるし、「findはまたはを意味する」は偽にちがいない。いったいこれも意味文は記述のはたらきをしないともいうのか^⑥。チザムのこの疑いは、記号作用にかんする不十分な見地から育まれたものだ。詳しくは他の文献にゆずるとして、かいつまんで要点だけを確認しておこう^⑦。記号は一方で意味されるものを透過する媒質である。

そのようにして記号は事物を代表する。(たとえば、記号デザイン「林檎」にはどこといつて林檎に似た性状はみとめられない。にもかかわらず「林檎」は林檎を意味する。これは語の指示がソシュールのいう意味で恣意的であることをあらわす。)他方、記号は不透明な肉体で表現する。この林檎は酸っぱい、という発言がそれ自体酸っぱいはずはない。しかし、言い方によっては「酸っぱい」という形容詞がいくぶんかすでに酸っぱさを—文字通りではなく、比喩的に—表出する。このように、記号の能力には記述、指示などのほかに、表出、例示などが数えられねばならない。記号作用としてただ前者のみをあげつらう代表主義で、チザムの眼差しは曇っている。意味文が記述をおこなわないというセラーズの真意は、それがあらゆる意味で「意味し」ないということではない。このかぎり意味文は真理値を担う。しかしその意味のはたらきが代表主義の慮外にある「示し」の次元に属すること、このことを彼はいいたいのだ。

点引用の記号としての働きはこれでおおよそ明らかになった。これを元手にしばらく従事すべき仕事がある。点引用の意義を、この理解を光源として、あらたにいくつかの角度から照らし出すこと。こ

の点をめぐっては、セラーズとチザムのあいだに交わされた書簡がとりわけ助けになるだろう。というのは、そこには含みの多い見解の、かすかすが発見されるからである。

七 意味理論の革新へ

あきらかに意味文は記述的情報を伝達する（だからそれは真だつたり、偽だつたりする）。だからといって、この種の文はそれを断言するわけではない。しかしまた、この「伝達」を、あたかも泣き顔による悲しみの表出のような情報の表現形式と同一視してはならない。こうしてセラーズは意味文の働きの「独自さ」を、成心をまじえず受けとめるよう勧める。チザムの手紙に答えて、彼はまたこうも述べている。意味文は思考にかかわらせて分析できないし、またそれをなにか経験的事象の「記述」とか「説明」と見做すのも、それを「指図」や「正当化」と見做すのが不都合であるように、やはりできない相談だ、「意味する」という動詞がつくる文脈は、この意味で「独自の談話様式の核」(core of unique mode of discourse)にほかならない、と²⁸⁾。

かといつて独自さをあげつらうだけでは、意味文を正解するためにももの半分も役にたたないことも自明である。チザムにいわせるなら、意味文の分析を心的指向性にかかわらせずに完遂できるはずはないのであつて、セラーズは単に意味論的範疇の「独自さ」といつた空疎なことばで所説を偽装しているにすぎない²⁹⁾。たしかに、セ

ラーズが意味文の独自さを強調する主旨が多少曖昧ではないだろうか。点引用が独自の記号作用を発揮すること、これはわれわれの確認事項である。しかし、当該作用はなにも点引用の専売ではない。旧世代の研究者が記号の代表にのみ注意をはらう結果、他の作用を無視し記号の働きを瘦せ衰えさせたのは確かかもしれない。点引用は記号にひとつの豊かさをあたえた。だからほんとうの問題は、記号作用の類別にかかわるその形態ではなくて、作用の内容であるはずだ。いいかえれば、意味文が体系的にどのような振る舞いを示すか、この実質をあきらかにすべきだろう。独自の点引用の作用ではなく、点引用にことよせて構想された意味理論そのものである。そこへ深く理解を届かせるためには、念には念をいれて、われわれの歩みを守る平坦な道を見いださなくてはならない。ここで二人の哲学者のあいだに取り交された手紙をおもな手掛かりに、意味理論への堅固な鋪石を据えたいと思う。おおづかみしていうと、当面の問題は三点にわたる。

(一) 点引用分析は「分析」ではない

チザムは対立者セラーズに次の主張を帰している。つまり、思考の意味作用(meaning)は言語のそれにより分析できる、この逆は成り立たない、という主張を。チザムにすれば、言語の指向性は心的指向性に基づくのであるから、心的指向性をリアルなものに数えないセラーズは、要するに、前者を後者へ還元しているとしか映らない³⁰⁾。意外なことに、当のセラーズはこうした主張を甘受するそぶりさえ見せないのだ。そんなことを私は絶えていったことはないし、

もちろん逆に言語的指向性が思考のそれによって分析されるなど、いちども称したことはない。この種の発想をおこなうのは実はチザムそのひとである。彼は自ら作りだした幻影に翻弄されているにすぎない。こうした主旨をセラーズは述べている^⑩。

どちらの言い分がもつともなのか。紛らわしいのは「分析」ということばである。ある主題にかんするなにか理屈立った言及をすべてこの語で一括するのは、あまりに乱暴というものだ。幸いセラーズは、チザムのことば使いを念頭に「分析」について説明している。

xがyを分析するという事実は、xの概念を有する者が同時にyの概念をもつという事実を意味する（もちろん逆は成り立たない。ふたつの概念をもつからといって、一方が他方により分析されるとはかぎらない）。この場合、論理的次元に即しているなら、被分析項xと分析項yとは意味が同じ、すなわち同義であり、また實在の次元に即しているといふと、xが代表する存在者とyがそうする存在者とに差し引き過不足があつてはならない。この種の分析は前の点で理想的な「翻訳」に似ているし、あとの点で「還元」をおこなう分析だといえるだろう。テキストを読みかえてみると、たしかにセラーズもこの意味で「分析」を云々した箇所がある。ただしそれは古典的な意味文分析を彼が拒んでいる場合なのだ^⑪。

意味文の分析はメンタリストに対して拒まれただけではない。セラーズはそれを行動主義者―彼が「スキュラに飲み込まれし者」と呼ぶ輩―にもきっぱりと拒絶している。いいかえれば、「意味する」をはじめ一連の言語表現を行動とその性向によって分析するのは不

可能である^⑫。点引用の記号論的「独自さ」のひとつの眼目が、こうして浮かび上がってくる。心なる実体（あるいはその作用たる心的指向性）と身体（その様態としての行動ないし性向）の二項対立をはるか離れて、人間のリアルな在り方を再考する出立地点をくつきり大地に刻み込むこと、こうした企図を可能にするものとして、この意味でのみ「意味する」という述語は一種独特で（*sui generis*）あり、反分析のしるしを帯びるかぎり「原始的」(*primitive*)といわざるを得ないのだ。

もちろん意味文の独自さがあるべき（悪くいえば独断的）形而上学の高みから演繹するのはフェアではない。点引用の反分析性は要請されるものではなく、事実のなかに発見されるべきだ。この点をめぐり、セラーズは意味文のひきずる特異な事情を指摘している。彼にいわせれば、ワイトゲンシュタインのあの格率「名辞の意味とはその使用である」はこの場合なんの役にも立たない。というのは「意味する」の意味を分析するための「使用」など、どこを捜しても見当たらないから、と。彼のいいたいののは概ねこうではないか。定義には大別して、明示的なものと文脈によるものがある。後者はまた「使用上の定義」とも呼ばれる。この場合、直接あからさまに名辞をはかの名辞により置き換えるかわりに、その名辞が生じる文脈から間接的にその意味を規定するのである。たとえば「平均」という用語をすでにその意味が決定済みの語だけを使って定義することができ。またそのかわりに、「六歳の男児の平均体重は二一キロである」といった文のなかで当の語がどのように使用されているか

の説明をつうじて、その意味を規定することもできる。ところで、文脈から意味を囲い込める上に明示的にも二重に定義できる「平均」のような語とは異なり、定義の重ね合わせがはなはだ難しい語も少なくはない。とくに論理的な用語はこの点困難を極める。論理学者は「かつ」とか「または」といった論理語に真理値表を用いてただ使用上の定義を与えるにすぎないし、存在をいう「ある」が明示的定義を決して受け付けないことは明らかだ。存在とはこれこれである、といった途端に定義項に存在への言及が混ざるからである。「意味する」はこれらの論理的な用語に酷似している。談話のなかで体系的役割を果たしているくせに、あからさまな定義からはつねに滑り落ちてしまう。かといって、それに使用上の定義を付与できるだろうか。「かつ」とか「ある」とかにこの種の定義をあてはめられるという意味に近似の意味においてなら、たしかにそうできるかもしれない。が、この定義は明示的定義への切り替えがきかない。その点で「分析しうる」使用をとまなわらないのだ。

他の言語要素と規則的に結合するという意味では、なるほど「意味する」は固有の使用に囲まれている。にもかかわらず、この規定性をなんらかの特性として結晶させることは不可能である。「ある」や「または」は特性を、存在性や選言性を指示するのだろうか。「英語の be はあるを意味する」から「be が意味するなにかがある」を推論するのが自由であるように、「means は意味するを意味する」から「means が意味するものが存在する」が導かれる。非の打ち所のない推論だ。しかし、こうした考察の糸に手繰り寄せられた「もの

は、それを特性と呼ぼうが呼ぶまいが、およそなにもでもない。²⁴

(2) 意味文は「記述」ではない

意味にかんするチザムの主張には、これまで考察の的にした、思考による分析の体裁をとるもののほかにいくつか別の形態があった。前出のように「語の意味と使用を記述するのに使う文は通常指向的である」はその一例だ。たとえば文「*Samuel* は英語で巨人を意味する」には巨人がいるともいないとも、そうした存在にかんする合意がともなわない。この文の否定形にしても同様である。それゆえ彼が開発した指向性の基準で測定すると、この文からは指向性なる性が検出される。そして言語的思考性の根拠が心的なそれにあることは自明だから（とチザムは推量する）、意味文が言語の意味を「記述する」事実が「思考」を基本用語に採って分析できるにちがいない。チザムのこの推断を牽引したのは、すでに確認済みの「意味文の分析」という当を得ない観念と、分析がたった二つの見地によるしか遂行不可能であるという、彼が我が身に背負いこんだ二者択一である。彼はことばの意味の解明が思考によりなされるか、あるいは行動（その行動主義的意味合いで）によりなされるか、どちらかではない、これに第三の抜け道はありえないと頭から決めておいた。彼の敷設した道を追隨するいわれは、しかし誰にもない。他方セラーズが俺まず明示に努めているのは、古典的二元論からは「第三位」を押し付けられているが、実は二元論の序列に甘んじる筈もないもの、この意味で「独自の」もの、むしろそのままでは可知性を欠く古典論にそれを恵贈する点で固有の首位を守るもの、こうしたもの

なのである。しかし当面問題なのは、意味文が記述をおこなうというチザムの理解である。

意味への確実な道を築くためにわれわれが据える鋪石は、またしても否定的なそれだ。セラーズによると意味文はなにも記述しない^⑤。この用語に明示的定義を彼が施している形跡はないのでその真意は推し量るしかないが、およその意味は明らかである。ことばに含ませたり、ほのめかしたり、あらわに展示したり、表現したりするかわりに、はつきりことばに出して語るとき、ひとは記述している。「この林檎は赤い」、「彼は背が高い」などはいずれも記述である。まえの文で話し手は、いかにも食べたそうない方で暗に林檎を欲しているのかもしれない。しかしこの欲求は記述の対象ではありえない（話し手は林檎を欲している）が欲求に言い及んだ記述であることと比較せよ）。こつした意味で、意味文はなにも記述しないのである。しかしことがらが紛糾するのは、チザムが理解する「記述」に問題の文がある点で合致するせいである。つまり意味文は真理値をになうのだ。いいかえれば文は記述的情報を伝達する。「この林檎は赤い」が話し手の心理についてなにかを伝達する（記述ではない）ように、そのうえ伝えられた内容が真や偽でありうるように、意味文に内容がともなうかぎりそれは「記述的」である。実際、この点を否定すればセラーズは意味理論構築のあらゆる足場をうしなうだろう。というのも、もしそうすれば意味文が真理値をになうこと自体がリアルなことがらではなく、ひとの思いなしに変質してしまうから。次にこの点をはつきり見届けておこう。

彼は「意味する」という語の特異な性状を「べし」(ought)に比較して、ふたつとも選言や否定などの論理語ではない点で「記述的」であるといえはいるかもしれない、と述べている^⑥。比較の狙いはどこにあるのだろうか。ある論者が指摘するように、対象の階型 (type) という観点が有用だろう^⑦。あるものを第0階の階型に置く^⑧とせよ。この対象について記述する語が代表するもの (特性) には一段上の第一階があたえられることになる。たとえば、この花が第0階だとすると、花の赤さは第一階となる。ところで意味語や様相語が代表するものは (もしそんなものがあるとして)、文の内容の一部でありながらけつして第一階の特性ではない。「べし」を用いた規範文、たとえば「ひとは誰でも人間として尊重されるべきである」は真理値を担うように見える。人権思想を奉じる近代人はこぞつてこの文は真だと叫ぶだろう。にもかかわらず、文が指し示す「真理」が客観性を欠く恐れがないとはいえない。彼の叫びはそうあれかしと願う彼の「態度」の表出にすぎないか。とすると規範にかかわる学は成立を諦めなければならない。学の幻影の崩れた跡地は、心理学、社会学などの、「外的な」理説に占拠されるだろう。セラーズは意味文に「記述的」な性状を確認しながら、それを記述可能な性状、換言すれば第一階の特性とは金輪際認めない。はたして彼是人権の根拠などにまるで意を用いず、ただ声高に人権を叫ぶ激情家の仲間にはすぎないのか。

この隘路を抜けるには、あたかも意味文において問題なのが第二階の特性であるかのように見做す以外術はない。たとえば時間はし

ばしば直線としてイメージされる。意識の直接与件を重んじる哲学者はこれを偽りの表象として口をきわめて難じる。たしかに直線上の一点は空間のある位置をあらわし、時のうえの一瞬はその前後から質的に区別された独自のモメントだ。点と瞬間とは決して似ていない。にもかかわらず常識が時間を直線になぞらえるのは、それぞれの性状の差異を別の類似が補ってあまりあるからである。ある点の後にまた点が続くように、ある瞬間には別の瞬間が後続する。点にそなわる構造がある範囲で時間の構造に類似するのだ。時間の隠喩として直線が役立つのは、その第一階の特性ではなくむしろ第二階のそれのお陰なのである³⁸。意味文の場合もこれと同じだろう。

そこに盛られた「記述的」情報は意味作用の特性を示さない。というのには、土台そうした特性があるはずもないから。にもかかわらず意味文がある意味で記述的なのは、「意味作用」なる特質ではなく、それに伴う事実的構造のお陰なのだ。大幅に残された仕事は、いくらか曖昧に聞こえる「事実的構造」の構造性を哲学的に解明することである。われわれが「哲学的」とわざわざ断るのは、構造的事実的規定性の究明にあたるのは経験科学の任務であって、哲学はそれと連携を保ちつつも、むしろこの任務を制約する条件の探究を本来の使命とすると考えるからである。

(3) 指向性は「特性」ではない

点引用は分析を意図しない。そもそも意味文は記述をおこなわない。それというのも、指向性とはチザムが信じるようななにか特性といったものではないからだ。こうして、われわれは第三の否定を

足場に据えることになる。この点を巡りふたりの哲学者はしばしば応酬を重ねた。チザムの立場では、指向性が意味文の「特性」でないことと語ることとは不条理にすぎない。もし言語に指向性とよばれる性状が具わらないなら、その検出に奔命したのは徒労だったのか。そんな筈はない。無論彼の努力は多とされるべきだろう³⁹。真の問題は指向性を「特性」と呼ぶその真意なのだ。メンタリストたるチザムは言語的指向性の源泉を思考の作用に求めている。彼は得意になつて天体の比喩をもちだす。ことばは意味をあらわす。しかし考えでもみよう。紙のうへのしるしや物音がそれ自体意味を發揮できるものかどうか。たしかに月は闇を照らして光る。けれどもし太陽がなかつたら、月も輝きを失う。太陽なくして月が光らぬように、思考の意味作用がなければことばはその徳をすべて失わざるをえないのだ⁴⁰。

言語の意味が思考のそれにより分析されるといふこの見解は、言い換えると、言語的指向性なる特性は心的指向性を成分として含むという主張に帰着する。言語が意味するという現象の本来の立て役者こそ、心の指向性なる「特性」なのである。なるほど立派なものだし、結構な特性だ。しかしかえって困惑はここに窮まる。パットナムの言うように、たとえそのような特性があるととして、ひとはそれについて何一つ知らないし、知ることができない。永久に神秘な力であり続ける⁴¹。古人がいったように、死と太陽は凝視できないというわけだ。

指向性を特性に祭り上げるのは、心をかえって空虚にする仕業で

ある。たとえばデカルト。考え、想像し、意欲し、こうしたあらゆる働きの主体である思考は、もうひとつの実体である物体とは――それが神の造られた実体であるという一点をのぞき――まったく似てはいない。このため心はかえって高く尊くされ、肉体の崩れた後の存続の可能性を請け合われる。質料じみた汚点をきれいさっぱり拭かれることにより、逆に絶大な権能を授かるというからくりは、デカルトが中世から脱け出るために案出した方策のひとつである。彼を育んだアリストテレス、トマスの伝統は身体を宿りにこの世界に住む人間の在り方に、よほど意を用いていた⁴²。もうひとりを名指せばサルトル。彼こそ徹底した自覚のうえで意識の純化をその極北まで押し進めた英雄である。その結果人間の自己は無に、いやそう名づけた途端それはすでもう「無」なる何かに変質せざるを得ないがゆえに、あらゆる意味で「もの」であることの純然たる否定として、ひたむきな「無化」にそれは転身したのである⁴³。

特性を掴もうと企てた手が握りしめたものは、もはや名状しがたい力、無でしかない。この道行きを思いとどまり、出立の地点へ戻るべきだ。セラーズの真意はそうした提案にある。類比説の詳細な検討以前の現段階では心への言及を気安くなすべきではない。しかし、この説では言語的指向性こそ心解明の鍵なのだから（正確にいうと、へ心）概念は言語的指向性をモデルに構想されたものなのだから、類比が有意性をもつかぎりにおいて、そうした言及の先取がじつは許されているのである。だが慎重に順を追いたい。Giantという語が巨人を意味する、というこの働きは、古典論者にすれば明瞭な

特性に映る。「意味する」は「蹴る」や「食べる」と同じ動詞であり、いしころを蹴ること、林檎を食べることがいずれも人物の特性であるように、同じ動詞仲間の「意味する」が特性をあらわすことは自明ではないか。しかし彼らの論証はここで行き止まりだ。特性をなにか「内的な」標識（いいかえれば第二階の特性）を挙げて、これを見よとは決して指せないのだ。指向性とは特性を欠く特性である。ひとは色彩がどのようなものか「知る」という語の普通の意味で知っている。光が射さない所で色をみることはできないことや、二色を混ぜ合わせると違う色があらわれることも知っている。また行為がどのようなものかも分かっている。それはそうしようと欲して生起するできごと（ただし自分の場合）であり、それなりの理由がともなう事物である。ところが指向性はまさにそれが指向性であるという特性以外、捉えどころが一切ない。それを「作用」と呼ぼうとなんと呼ぼうと（われわれも慣例に従ってきたが）、ことが明らかになるわけではない。

特性を言語的指向性から免除する代償は大きい。前項で見たように、指向性は内容を確実にともなう。（意味文が記述的情報を運ぶ事実、これは対応する。）それは無でもなく、無内容を神秘力でもない。いいかえれば指向性は特性の資格を諦めるかわりに、いわば肉体を授かるのだ。ことばは化肉の秘蹟にあずかる。具体的にはこれは次のような至極当たり前の事象をいう。すなわち、意味文は言語要素を機能のうえで類別するというのがセラーズの洞察だった。Giant, Riese, géant, 巨人と、どう語っても同じような意味をあらわ

すことが可能だ。発語の経験的特性（これを調べるのは言語学の各
学科だ）がそれぞれに異なるにもかかわらず、いうまでもなく発語
は時空のうちに生起するできごとである（思考も別ではない）。英語
教師が口にした rant は巨人を意味するそのかぎりで、・巨人・
である。もとより古典論者もこのことを彼ら流儀で言い立てる。し
かし彼らが忘れている（あるいは忘れた振りをしている）のは、そ
の語がしかじかの語としてひとの耳朵に触れるという事実である。

将棋の駒が大きささまざまな大きさ、形、色、彫られたアイコン、盤
上の定った動き、成りという振る舞いなどを、それぞれ具現するこ
となしに、将棋というゲームができるだろうか。言語というゲーム
の場合も同様である。言語要素は意味するために「きまった事実上
の性格」(determinate factual character)を伴わざるを得ない⁽⁴⁾。

古典論者はことばの肉体に眼をふさぐ。ことばから心的実体が逃れ
去れば、残るのは単なる「しるしや物音」にすぎないと彼らは断定
する⁽⁵⁾。こう言わせるのは、しかし、彼らの抱え込んだ物と心の二
元論にほかならない。単なる物音が意味の力をもたぬことはセラ
ーズもとより承知である。問題はことばという名の物音なのであつ
て、「単なる」物音ではない。古典論者は言語の自然への根差しを截
断し、一旦それを死に追いやってから、改めて思考の魂をそこへ吹
き込むといった、念のいった操作に得意だ。しかしこの代価は莫
大である。以後言語からは固有の可知性が失われたのである。

ここに露呈した論点を整理しておきたい。第一点。しるしや物音
は言語使用をおこなう動物が生産した場合にかぎり意味をもつ。オ

オムの物真似や録音機のとてる音声は、言語として聴取される可能
性を残すものの、それ自体は言語をなさない。セラーズのこの見解
は、チザムが疑っているように心的指向性を前提しないだろうか。

われわれの答えは簡単明瞭だ。そのような「前提」は確かにチザム
のものかもしれない。が、自分の前提をひとに強要する権利はだれ
にもないはずだ。心的実体と「単なる」物理的存在者の原理的対立
を離れた、その意味で「独自の」言語の力を、ただそれだけの容認
で充分である。しかし、第二に浮上する論点がある。すなわちこと
がらの詳細は今後の解明を待っているのである。そうした言語の力
とは具体的にどのようなものなのか。「言語使用をおこなう」動物
をオムから断然区別するのはなにか。物真似上手なこの小鳥は、
なにかを語るつもりで音声を発するのではない。意味とは、それで
は「意図」に基づくのか。だとすると、独自のはずのかの力は、案
に相違して使い古された実体の属性に異ならない。たとえばこうし
た問題（それはほんの見本にすぎない）の解明が待ち望まれている
のである。

第二の問題はこの節のまさに核心に触れた危機的な論点であり、
改めて省察に値する。われわれはセラーズの探究に導かれてことば
の肉体を再発見した。けれどもチザムが棹さす古典論からの反撃は
必至である。なるほどことばは記述可能な内容なしには働かないか
もしれない。それをことばの「肉体」と呼ぼうが、それは随意だ。

しかし、言語の経験的諸条件は単に必要条件にすぎぬ。それだけで
ことばに生命が宿るだろうか。いいかえればそれは言語の十分条件

か。疑わしいのはこの点である。こうして古典論者はまた旧態依然たる心的実体を導入するのである。反撃をかわすにはひとつの道しかないように思われる。言語の経験的諸条件が、ある意味で、またその十分条件であると、換言すると、言語の肉体こそ言語そのものであると、言い切ることである。繰り返すことになるが、これは心というものが存在しないなどという無茶な抗弁ではない。むしろ心は古典論の囲い込みから放たれて、いまこそ自由な姿で蘇生するのである。このような視角を確保しうることが、類比説の可能性のひとつである。しかし問題の詳しい踏査は後にまわさざるを得ない。この場ではただ、意図を基本に構想されたグライス流の意味理論にわれわれが多量の疑いを抱いている事実、意図にかえて、規則、行動、構造といった一連の概念を掘り下げるべきだろうという見込み、ただこれだけを言っておきたい。

八 結びにかえて―実在論の彼方

類比説の検討にむけてまず言語的指向性を精確に定位するという当初の目的は、ほぼ達成できた。セラーズの構想は広くかつ深い。その可能性を多様な部面でつきつめていく仕事が今後に残されている。本稿の暫定的結論としていえるのは次のことだ。彼の構想は今世紀の言語探究の底にある、きわめて重要だがしばしば気づかれずに已む伏流から生命の水を汲んでいる。記号の代表主義にかわる新たな記号観がそれである。古い記号観が記号の機能を節減する結果、

実体としての心か単なる物質かの二極分解へ滑り落ちていったのに対して、新たな記号観は記号の具体性をあまざす掬い取るうとして、究極、記号の「自然」への帰還を図るのだ。もしここに立って意味理論全体の再考ないし再興を計るとすれば、われわれは遙かに何を望みうるか。この問いに答えようとする多くの試みがあるなかで、セラーズの営為は体系性、全体性、歴史への絶えざる顧慮、経験科学との連接などの点で一頭地を抜いている。あまりにも学識に富む精緻巧妙な哲学に比較して、彼のことは(またわれわれの解釈も)大鈍をふるいすぎると不平を唱える向きがあるかもしれない。それはなにかの誤解だろう。古典的な心身二元論(特に心的実体を認める点でメンタリズム)と物理主義(あるいは行動主義も含めひろく唯物論)の二者択一とはべつの道筋があることを、身に徹して知ることが当面なよりも大事である。セラーズの構想はすくなくともこの知の所在を照らしている。

目的の地へ向けてわれわれは、新たな一步を踏み出す際の常として、まず消極的な方位を見極めることから始めた。意味文は関係をあらわすのではないし、点引用は分析ではない。しかし今一度、これまで観察に立って積極的に意味文のなかみを明らかにしておく。「意味する」という言い回しは言語要素の機能分類をおこなう。セラーズがほのめかしているように^⑧、それは言語要素と非言語要素との関係ではなく、言語要素のなかで生じる付き合わせである。といってもそれは常識が思い込んでいるような、同義性を原理とする翻訳ではない。同義性とはいわば結果である。当面クワインが掲

げた翻訳の不確定性テーゼを「論証」抜きで認めておきたい。ある言語要素に別の要素が付き合わせを得るのは、テーゼによれば言語理解の場合の「分析仮設」の投入による。翻訳できたからふたつは同義なのであって、同義だから翻訳できたのではない。この種の「翻訳」はほとんどそのまま「理論的解釈」と言い換えてかまわない。蓋し、意味が眼で見えない以上、当然だろう。意味とはそのまま直観するものでありながらどこまでも理論的存在者でありつづける。テーゼは「正しい」翻訳を云々することの無意義を語っている。しかし、われわれは常日頃翻訳を正解と誤解にふりわけているではないか。とするなら言語的指向性の「独自さ」は見せかけにすぎなかったわけだ。というのも本当の翻訳はその正否を語れるものでなくてはならず、それを果たしに思考が登場せざるを得ないから⁽⁸⁾。この疑念は不確定性の位置する水準を見誤っている。意味以前から意味へ光が奔流となつて溢れる刹那に、正しさをかれこれいうのは意味がない。ほとぼりした光がその後正否の目盛りを照らすだろう。翻訳が不確定であるということと正しい翻訳を判断することは、両立する。概念図式の相対性と図式の正しさという概念とが折り合うように。翻訳は原理的に不確定のまままでいて、しかも現実⁽⁹⁾にそれを確定する条件をわれわれは持ちうるのである。

逆説としか呼びようがないこの事態をはつきりさせる仕事は、しかし、べつの機会に譲るほかはない。もう一点だけ、意味文が理論を包含するという見地への疑問に触れておく必要がある。パットナムによれば、この見地が正しいとしても（彼はこれには異議がない

という）意味理論としては些末でしかない。というのはあらゆるタイプの理論と両立する構成をそれはそなえるから⁽¹⁰⁾。（ちなみに彼は意味理論の目的を、そもそも言語表現が意味を有するということの説明と理解している。）セラーズは直ちにこう切りかえす。問題は任意の理論ではなく正しい理論だ。パットナムと共有する意味にかんする唯名論は「意味する」を代表格とする一連の述語を一種のコブラと解釈してはじめて得られる。われわれはコブラの背後にどのような構造が横たわるかを見届けてはいないが、もしそれが何か旧式の抽象的存在者を巻き添えにするなら、ここに半歩の前進もないのは明らかだ、と⁽¹¹⁾。

二人のやりとりを整理しポイントをつかみだしておきたい。セラーズにより遂行を見た指向性の非作用化は唯名論的企図にいつもまつわる難点を伴っている。唯名論者は抽象的存在者を存在の圏から放逐すると標榜するが、結果はいつも額面を割っている。というのは追い立てられたものの代理に別の抽象的存在者が引き入れられるからだ。しかしこれをもって彼の企てが総じて無益だとは言えない。問題は正しい見地なのだし、正しい見地に要請される必要最小限の普遍者なのである。具体的にしかじかのものがお払い箱になりこれこれのものは残留を許可されたという具体的な理論構成に即さず、見地が一般的すぎると極め付けたら唯名論としては失敗だと概括するのはあまり意味がない。セラーズの見地に従うとき何が失なわれ何が獲得されるか。収支対照表の損失の欄に、特性としての指向性、思考実体、心身二元論、特性や意味にかんする実念論などを記入し

なければならぬ。けれども利得も少なくはない。わけても古典的な二元論に中立を保つ思考の可能性は利益として莫大である。意味にかんする唯名論的還元が実施された結果、古典的文脈全体が揺らぎはじめ、その回転は必ずや新たな普遍者が散在する文脈の再編を生むはずだ。

本稿を閉じるにあたり、回転の向かう方向を見定めるうえで最後に次を指摘しておきたい。それは正統派の意味理論と比較するとき、セラーズの構想の特異な貌が浮かんでくるという事実である。正統派は多かれ少なかれ実在論を引き入れていた。ふるくはスチュアート・ミルの、名辞を名(names)と見做す説にしてもそうだ。「ポチ」は一匹の犬なる個体ポチを外延指示する(denotes)。フレーゲの整理に従うと言語表現には「意義」(Sinn)と「指示項」(Bedeutung)のふたつがともなう。ここに与えられた意味作用は言語要素と非言語的なものとの関係にはかならない。後者は個別者とはべつの次元に属する存在者を許容する点でいわば二重に実在論者である。これにひきかえセラーズの見地からは、言語を言語ならざるものに関係させるという発想が自覚的に拒まれていた。giantが巨人を意味するということは、彼によるとgiantは・巨人・であるということにすぎない。主語が言語表現なら述語もそうなのである。言語の根もとに類別のはたらきが発見されたということはなにを語るのだろうか。曖昧に聞こえるのを承知でいえば、それは、存在者の秩序と記号の秩序をいったん分離し、しかも二つを同一のものとして重ね合わせるということだ。あるいは記号に存在が胎胚する瞬間に身を投じてそこで

蘇ることである。現象学流にいうと「実在」を意味としてはいったん排去したうえで、改めて世界(秩序)の生成をコスモスの誕生を―目撃することなのである。(未完)

注

- (1) 本稿は、菅野盾樹「指向性について」〔33〕第五章(の続きのひとつとして書かれた。なお類比説に関連して「言語と思考」(同書、第二・三章)も参照していただきたい。
- (2) Sellars [22] 参照。
- (3) 菅野盾樹 [33] 第五章で詳しく考察した。
- (4) Chisolm [5], p. 45f.
- (5) *ibid.*
- (6) この点をめぐりチザムとその批判者のあいだでやりとりがあった。Sleigh [32] および Chisolm [4] を参照。
- (7) Chisolm [4] p. 31; p. 52.
- (8) この種の理解はたとえば Searle [21], 2.4にある。
- (9) チザムは「命題」を心的実体と見做すリアリストである。Chisolm [9], p. 50. また Chisolm and Sellars [7], p. 521 参照。
- (10) Chisolm and Sellars [7], p. 522, p. 523, p. 524, p. 527, p. 534 など掲げられている。
- (11) Sellars [27], pp. 79f.; [33], p. 311 et passim.
- (12) たとえば Sellars [24] を参照。
- (13) Bergmann [2] はこの立場を代表する。
- (14) さしあたり Sellars [23]: [25] 参照。
- (15) 類比説がそれとして探究してはいない主題がある。すなわち類比あるいは広く隠喩にはかならない。心概念が隠喩でしかないこととあわせて、菅野盾樹 [34] を参照。
- (16) ここでは Loux [11] による「再話」を参考にしてゐる。

- (17) ナンベツ Sellars [82], v 参照。
- (18) Sellars [82]・ナンベツ引用をめぐって Rosenthal and Sellars [91], p. 493f. 参照。
- (19) Marras [82], p. 18.
- (20) Church [∞] の翻訳論法を参照。
- (21) Chisholm and Sellars [7], p. 532.
- (22) Sellars [82], p. 430.
- (23) Putnam et al. [5], p. 469.
- (24) Sellars [82], p. 431.
- (25) Chisholm and Sellars [7], p. 532.
- (26) Chisholm and Sellars [7], p. 529.
- (27) 記号観の展開はゴッブ・レカナニィ [17] を参照。新たな記号観から
 ナンベツな仕事ゴッブ・ Goodman [9] を例挙している。
- (28) Chisholm and Sellars [7], p. 527.
- (29) Chisholm and Sellars [7], p. 523.
- (30) Chisholm and Sellars [7], p. 524.
- (31) Chisholm and Sellars [7], pp. 529-530.
- (32) Chisholm and Sellars [7], p. 530. しかしセラーズが例外なところを
 ナンベツのはねを喰うたように。 Chisholm and Sellars [7], p. 524 以下は
 例外の一例。
- (33) Sellars [82]; Chisholm and Sellars [7], p. 523.
- (34) Chisholm and Sellars [7], pp. 525-526.
- (35) Chisholm and Sellars [7], p. 523f.
- (36) *ibid.*
- (37) Aquila [一], p. 123; Rosenthal [8], pp. 120-122, note 1.
- (38) 認識にはたまた隠念の役割をめぐって Lakoff and Johnson [9]; 抽象
 盾樹 [84] を参照。古典論者ラッソフの「意味作用」もまたこの
 隠念にはかならな。
- (39) 菅野盾樹 [83] 第五章における「ナザムの企みの評価」を
 見よ。
- (40) Chisholm and Sellars [7], p. 524.

【文献】

- (41) Putnam [5], p. 2.
- (42) Cantore [∞], p. 5 参照。
- (43) Sartre [20] 参照。
- (44) Sellars [82], pp. 316-317. ローゼンタールはナザムが指向性の事実上
 の柱を無視していることを指摘している。 Rosenthal and Sellars [91]
 pp. 405-406 を参照。
- (45) ナザム側はこの論点を毎回持ち出す。たとえば Chisholm and Sellars
 [7], p. 524. セラーズはたまた「これを肯定している」。 Chisholm and
 Sellars [7], p. 525 参照。しかしこれはかえってナザム側の「言語行動」
 びかんとする誤解がある証左なのだ。物音を立てることによって音を発する
 ことが導くのは腕の上方への運動が腕をあげることを導くのと同様で
 ある。 Sellars [16], ch. 5 はこの議論がある。
- (46) Sellars [82], p. 509.
- (47) Young [8] に表明されたセラーズ批判もこの点を拠り所としている。
- (48) Putnam [1], pp. 445-446.
- (49) Sellars [82], p. 459.

- (9) Goodman, N.: *Languages of Art*, 1976.
- (10) Lakoff, G. and M. Johnson: *Metaphors We Live By*, 1980.
- (11) Loux, M. J.: "The Mind-Body Problem" in Delaney, C. F. et al.: *The Synoptic Vision*, 1977.
- (12) Marras, A. (ed.): *Intentionality, Mind and Language*, 1972.
- (13) Marras, A. "Introduction to *Intentionality, Mind and Language*" in Marras (ed.), 1973.
- (14) Putnam, H.: "Comment on Wilfrid Sellars", *Synthese*, vol. 27, no. 3-4, 1974.
- (15) Putnam, H.: *Reason, Truth and History*, 1981.
- (16) Putnam et al.: "General Discussion on Sellars's Paper", *Synthese*, vol. 27, no. 3-4, 1974.
- (17) レカナティ (Recanati, F.) 『レカナティの現象論』 新曜社 一九八二。
- (18) Rosenthal, D. M.: *Intentionality: A Study of the View of Chisholm and Sellars*, A Dissertation (microfilm-xerography), 1968.
- (19) Rosenthal and Sellars: "The Rosenthal-Sellars Correspondence on Intentionality" in Marras, A. 1972.
- (20) Sartre, J.-P.: *La Transcendance de l' ego*, 1965.
- (21) Searle, J.: *Speech Act*, 1968.
- (22) Sellars, W.: "Intentionality and the Mental" in Feigl et al. eds., *Concept, Theories, and the Mind-Body Problem* (Minnesota Studies in the Philosophy of Sciences, vol. II), pp. 507-509, 1958.
- (23) Sellars, W.: "Notes on Intentionality" in Sellars, W.: *Philosophical Perspective*, 1959 and 1967.
- (24) Sellars, W.: "Abstract Entities", *The Review of Metaphysics*, XVI, 4, 1963.
- (25) Sellars, W.: "Empiricism and Philosophy of Mind" in Sellars, W.: *Science, Perception and Reality*, 1963.
- (26) Sellars, W.: *Science, Perception and Reality*, 1963.
- (27) Sellars, W.: *Science and Metaphysics*, 1968.
- (28) Sellars, W.: "Language as Thought and as Communication", *Philosophy and Phenomenological Research*, XXIV, no. 4, 1969.
- (29) Sellars, W.: "Meaning as Functional Classification", *Synthese*, vol. 27, no. 3-4, 1974.
- (30) Sellars, W.: "Reply", *Synthese*, vol. 27, no. 3-4, 1974.
- (31) Sellars, W.: *Naturalism and Ontology*, 1979.
- (32) Sleigh, R. C.: "Comments" in Castañeda, H.-N. (ed.): *Intentionality, Minds and Perception*, 1967.
- (33) 新曜社 『我』 のことば 一九八三。
- (34) 新曜社 『レカナティの現象論』 勁草書房 一九八五。
- (35) Young, J.: "Intentionality" *The Review of Metaphysics*, 26 (1972-1973).